

十勝管内で実施している農村ホームステイが今年過去最多の受け入れ人数となり、後半の受け入れ農家がやや不足気味なことから、主催するNPO「食の絆を育む会」（浦幌町、近江正隆理事長）では、受け入れをサポートする農家を募集している。同事業では都会の高校生に修学旅行で農家に宿泊してもらおうが、予定した農家が家族の病気や急用で受け入れできなくなることもあり、協力してくれる農家を探している。



農村ホームステイで生徒を受け入れた全国農協青年組織協議会の黒田栄継会長（芽室）。受け入れの輪は広がっているが、サポートのさらなる充実が必要になっている

同NPOは十勝管内の生産者などで構成。受け入れは今年で6年目で、過去最高の約3000人を迎える。前半は6、7月で終了し、後半は9、10月に大阪府立の6校から約1800人の受け入れを予定している。

食や農への理解を深めてもらうと同時に、都会では味わえない農村の暮らしを楽しんでもらう。1泊2日で1戸当たり2～4人（男女別）を受け入れ、作業体験だけでなく、食事や生活をともにすることで、触れ合いを大切にする。高校生1人当たり7000円の協力金が支払わ

れる。

現在、管内16市町村の生産者が12の協議会をつくり、市町村役場も協力して、受け入れ農家の調整などに当たっている。今回、協議会を通じて農家の意向を調査したところ、特に10月6、7の両日、同21、22の両日に受け入れてくれる農家がやや足りないという。

今後も、原則として各地の協議会が受け入れ窓口となるが、今回はNPOからも協力農家を臨時に募集する。

農村ホームステイは8月にTBS系テレビで、ドキュメンタリー番組（HBC制作）も全国放送され、注目されている。一度十勝を訪れた高校生は数年後に個人で再訪するケースもあり、それまで身近でなかった農村を近くに感じ、家族のような絆ができるケースも多い。

毎年訪れたいと希望する高校もあるが、受け入れ体制が十分用意できず、断らざるを得ないケースもあるという。近江理事長は「テレビでも放映され、今後、農村が持続していく仕組みとして可能性を感じている。多くの方に興味を持ってもらえれば」と話している。

不安や不明点があれば同NPOが直接説明に行くことも可能。問い合わせは同NPO（015・578・7955）へ。

農作業死亡事故相次ぐ 十勝管内3件連続 「機械停止徹底を」

2014年11月11日

十勝管内で9月末以降、農作業死亡事故が3件連続して発生、9日には高校生が死亡する事故も発生したことから、行政など関係機関は事故防止を呼び掛けている。

管内の農作業での事故死者数は2011年度、12年度はいずれも4人で、13年度は2人に減ったが、今年度は3人と昨年度を上回った。

今年の農作業は春先にほとんど雨が降らなかったため順調に進み、十勝では9月半ばまで農作業死亡事故も発生していなかった。

しかし、9月28日に本別町で酪農家の女性（33）が塔型サイロ内に飼料用トウモロコシを詰める作業中、発生した有毒ガスを吸って死亡。塔型サイロの多くは現在は使われなくなっているが、今も使っている農家もあり、過去には同様の事故が発生している。

昨年も9月に幕別町で塔型サイロで機械の調整作業中、高さ10mから転落し、男性（60）が死亡する事故もあった。

今年10月30日には浦幌町で、男性（62）がビート収穫前に葉を切る機械（ビートタッパー）で作業中、機械に

衣服を巻き込まれて死亡。

機械への巻き込まれは最も多い事故の1つで、昨年も8月に池田町で麦わらのロールを作る作業をしていた男性（25）が、機械（ロールペーラー）に巻き込まれて亡くなった（年齢は全て当時）。

いずれも作業機が詰まった際など、停止させてから作業することで事故を避けられた可能性が高い。

今月9日に帯広市内で男子高校生（17）がトラクターがけん引する荷台車にひかれて死亡した事故は、十勝管内の農業関係者にもショックが広がっている。帯広市以平町の農家は「この時期は暗くなるのも早く、注意が必要。気を付け過ぎて過ぎるということはない」と気を引き締める。

農作業中でなかったため行政の統計に入っていないが、10月に浦幌町の男性（83）が、自宅近くの菜園の手入れのためトラクターで出掛け、作業機（バックレーキ）にひかれて死亡した事故もあった。十勝総合振興局は「作業機に触れる際は停止するなど、基本的なことを徹底してほしい」（農務課）と呼び掛けている。